

環

(あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
瑠璃集	12
瑪瑙集	25
紅玉集	27
8月号月評	28
総合誌の窓	30
惠贈句集拝見	32
特別作品「地中海クルーズ1」	34
琥珀集作品鑑賞	36
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ	37
Ⅱ	38
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	39
俳誌交歓	41
他誌転載	42
批の国父の蒼天(17)	44
小滴のころ	46
ひこばえ通信(3)	47
伊根一泊吟行記(1)	48

今月の一句

朝市へいそぐけいか軽舸の秋茄子

桂樟蹊子

高知で出逢われた風景である。「朝市へ出す秋茄子の籠をのせた小舟。親子で漕ぎいそぐその小舟の茄子は、農家のいのちの輝きと なって感じられた」と註にある。茄子の紺の艶やかさまで伝わり、臨場感溢れる句に仕上がっている。

隆子

朱夏の丹後

塩路隆子

田植どき舟屋に舟を眠らせて
夏潮をひたひた呑める舟屋口
千枚田朱夏の海へとなだれけり
幻想の浦島絵巻みどりさし
松籟の式部歌塚鳥の恋
海青き橋立一里松の芯
南吹く安寿ゆかりの山良の浜
老鶯や如意穏やかか地に蔵尊
鬼あざみ嗤ふや太夫屋敷跡

八月号光耀抄

塩路 隆子選

言葉はや届かねば振る夏帽子
今朝の母ことに美しセルを着て
指を折る児の算数や花柘榴
コースター麻に替へたる三時かな
学窓の空はプリズム新樹光
宴終へ皿のパセリの孤独感
鈴蘭にほろりこぼせるひとり言
草を食む馬の目優し阿蘇の夏
連れ添ふも阿吽に遠し柿の花
点描で描き切ったり青葉山
ローカル線がたんと揺れて枇杷撓む
時の日や刻に追はるる禰宜と巫女
香水の一滴落とす不眠症
朱雀門にしぼし止まる夏帽子
雨に濡るる現の証拠や行者径
蛇料理草食系は近寄れず

岡 佳代子
宮崎左智子
森下 康子
安本 恵子
伊東 和子
北尾 章郎
和田 郁子
和田 史郎
和田森早苗
松岡 和子
三川美代子
竹内 悦子
田中 浅子
笠井 清佑
坂上 香菜
阪本 哲弘

鍵穴に朝の光りや明易き
 蔵書とて未読の多し梅雨に入る
 凌霄花晴耕雨読よしとして
 薔薇垣や密談めける女の子
 淡竹の香病院食に湯気のなき
 無造作に活けてしみじみ花菖蒲
 梔子のアンニユイ午後の診療所
 木道を遮る子猿山若葉
 晚翠の終の棲家やリラ咲ける
 打ち水に鹿のにほひの土産店
 脱藩の龍馬の大志雲の峰
 鯛網の浜に轟くふれ太鼓
 当尾の里の薫風わらひ仏
 五月晴独りうきうきショッピング
 薫風や大和三山遠望し
 若葉冷姉の箴言容赦なき
 リハビリの窓に遅日の落暉かな
 信楽の狸百態青嵐
 梅雨に入り染みあと残る世界地図
 今もなほ火の見櫓や夏燕

笹井 康夫
 塩路 五郎
 杉本 綾
 鈴木 照子
 小林 成子
 大松 一枝
 小澤 菜美
 長濱 順子
 田下 宮子
 常田 創
 青山 正英
 井口 淳子
 山口キミコ
 土井くみこ
 坂根 宏了
 能勢 栄子
 西垣 順子
 中川 すみ子
 宮田 香
 藤見佳楠子

生真面目な夫と五十年夏大根
 眠られぬ夜を生き生きと水中花
 料亭の紙燭に浮かぶ花菖蒲
 木苺やじゃんけんぼんのかくれんぼ
 傘しづく浴びつつ巡る紫陽花寺
 包まれし蓮の葉飯の昼餉かな
 母と子の紙風船や夏帽子
 田に映る比良を乱して早苗植う
 一尾づつ空より降り鰹釣
 えごの花思ひ出せぬよ失語症
 塩梅のまことよろしき豆の飯
 青蛙雨の葉裏に隠れをり
 松の花挙る橋立砂嘴一里
 夏蝶に誘はれゆく門跡寺
 つつじ咲く径を畏み納采日
 紫陽花の雨は優しき音となり
 万緑の空ぽっかりと気球かな
 地引網干せる海の辺けしの花
 昭和の日鷺の翔けゐる空の青
 五月闇平癒祈願の磴のぼる

前川ユキ子
 増田 一代
 松田とよ子
 松田 洋子
 宮越 久子
 福本スミ子
 藤本 秀機
 中井登喜子
 中本 吉信
 新実 貞子
 高谷 栄一
 田所 昌代
 田中 芳夫
 辻 知代子
 寺田 光香
 佐用 圭子
 清水侑久子
 片岡久美子
 桂 敦子
 川崎 利子

ごろり寝に風さわさわと麦の秋
 豌豆むく祖母と過せし通し土間
 秘めごとは一粒でいいさくらんぼ
 夏服の肘眩しかり女学生
 噂良き宿を予約や夏休み
 みつ豆に友の饒舌続きをり
 小夏たべ夫の故郷を訪ふ思ひ
 裏山の万緑背戸に迫りけり
 風褒めつ矢切の渡し薄暑なる
 お手植の立札確と松の花
 十葉を煎じてしのぶ母の愛
 山門の威容保てり若楓
 老鶯のアリア激しく峡の里
 賀茂祭の先導凜々し騎馬婦警
 ふうりんがちりんちりんとうたいます
 一一〇さい校しゃがんばれつゆの空
 雨のよるカエルのがっしょうたのしそう
 かさもつて花がさおんどおどったよ
 あじさいの当日限定しずくかな
 入梅に防水靴を準備して

小西 和子
 栗倉 昌子
 池田加寿子
 石川かおり
 泉 秀行
 伊庭 玲子
 上甫木伊都子
 宇治 重郎
 大島みよし
 落合 晃
 山本 節子
 山本 孝夫
 山本 丈夫
 横田 矩子
 森下 千聖
 土井ほのか
 廣瀬 将也
 塩路 彩奈
 廣瀬 結麻
 高野 綸

琥珀集

夕日影

宮崎左智子

緑陰に聞き上手なる母の椅子

今朝の母ことに美しセルを着て

南天の花こぼしたる夕日影

片脚は大原あたり朝の虹

雨兆す実梅しきりに落つる音

棕櫚の花その武骨さを吉と見む

さて何処へ行こうか五月旅ごころ

五月の風

岡 佳代子

地下出でて五月の風に染まりけり

驟雨来て真珠笈の浮き沈み

言葉はや届かねば振る夏帽子

茜雲湧くかに合歓の花咲ける

夏大根ひりひり母を恋ふ日なり

風鈴の音届きませ弥陀浄土

湖を渡る日射や蓮ひらき

花石榴

森下 康子

なぞなぞに頭を抱へたり電波の日

緑蔭に釘付けの瞳や紙芝居

抽斗は我楽多市や五月闇

指を折る児の算数や花石榴

笑ひ多々嘆き少々美女柳

バレリーナを夢みる少女水中花

三条の老舗たわし屋額の花

お成り

安本 恵子

パセリ

北尾 章郎

開店のカリヨン響く初夏の街

コースター麻に替へたる三時かな

へちま苗今年も採らむ化粧水

叡山の空に入道雲お成り

見とれをり若竹青くすくと伸び

夏めくや夕餉に使ふガラス皿

風鈴や心に軽き音ひとつ

雑木山

伊東 和子

鈴 蘭

和田 郁子

風騒ぎ青葉の遊ぶ雑木山

葉桜のいささか暗し寺領道

満開の牡丹に今日のひと日述べ

学窓の空はプリズム新樹光

薔薇の花ひらく気配やアンネの記

大玻璃にヴェイトンのバッグ風光り

痛む肩を摩ればまどふ青葉冷

老鶯や町のコーラス齡問はず

己が科池しなに写して花菖蒲

八つ橋や温泉宿夕べの菖蒲園

草原に都復元晷のこゑ（平城宮跡）

奥山の木洩れ日淡し閑古鳥

雨催ひ天へ無沙汰の夏雲雀

宴終へ皿のパセリの孤独感

鈴蘭にほろりこぼせるひとり言

羽衣のやうに揺れある白牡丹

里山に生活の紫煙業平忌

手際よき新茶の雫煎茶席

苺出て野球ゲームを中断す

そら豆のソフトグリーンや莢の中

朝涼しショパンの曲に目覚めたる

夏の色

和田森早苗

青葉山

松岡 和子

辿り着く邑に新茶や法被の娘
香を販ぐ法被の笑顔新茶選る
金雀枝の色にあふれる山家かな
口笛に釣られ乱鴛声高く
変りゆく眼鏡の色や夏日影
青嵐逆さ大山粉ごなに
連れ添ふも阿件に遠し柿の花

阿蘇の夏

西田 史郎

麦の秋

三川美代子

草を食む馬の目優し阿蘇の夏
薄紅のみやまきりしま人酔はせ
せせらぎや青葉若葉の川湯かな
「荒城の月」やみどりの岡城址
高千穂の緑蔭に観る神楽かな
溪谷の青々として滝の音
南天の咲くとも見えず咲きにけり

点描で描き切ったり青葉山
リフォームの形見の袖風五月
つばくろを静止画像で捕へけり
目が合うて上目遣ひし墓
赤きマル農事曆に梅雨の入
ふさふさと毛虫只今横断中
早苗饗の映画の夕べ「おくりびと」
カーナビの道案内や麦の秋
レストランの真白きクロス夏来たる
水無月や湖に大きな赤き月
ローカル線がたと揺れて枇杷撓む
蝌蚪の水比叡映してなほ静か
夏つばめ頭上掠めし整骨院
佇めば三井の山風みどりなる

茅花風

竹内 悦子

木漏れ日

笠井 清佑

時の日や刻に追はるる禰宜と巫女 (近江神宮瀧刻)

どくだみの邪鬼払ふかに広がりぬ

植田風広き近江に都会の子

墓道に辿る思ひ出茅花風

茅花風童謡歌ふひとり刻

葉柳に夢二の女出てきさう

薔薇散れりひとひらづつの潔さ

木下闇

田中 浅子

現の証拠

坂上 香菜

鱗鱗にも眉毛ありしよ風薫る

川底を覆ふ青葉の濃く淡く

木下闇貴船神社は水の神

滝落ちてゆたかに奔し貴船川

噴水の飛沫を風が運び来る

香水の一滴落とす不眠症

空を飛ぶごとくに泳ぎ小ペンギン

朱雀門にしばし止まる夏帽子

立葵登校児童迎へけり

夕風や凌凜船の入る港

葉桜や木漏れ日揺れる遊歩道

大極殿に仰ぐ天井絵夏帽子

梅雨に入る車輛いづれもくもり窓

短夜やメール返信儘ならず

虞美人草はやも卓布へ散る気配

菜園の門柱として立葵

通し鴨人目気にせず羽繕ふ

美しく凌霄散りし朝の門

養生の幕張る薄暑ビル壊す

扉を放ち車庫に玉葱干しぬたり

雨に濡るる現の証拠や行者径

瑠璃集

奈良公園

常田 創

黒南風や商店街の魚くさき
炎帝に頭灼かれて阿呆かな
打ち水に鹿のにほひの土産店
葛切りのつやつやとして吸はれけり
火虫ひて桜井線の終列車

山若葉

長濱 順子

河童橋の揺れに佇み大雪溪
木道を遮る子猿山若葉
緑蔭に有料トイレ上高地
カウベルの鳴れるリュックや若葉風
梓川小径の処々に二輪草

大志

青山 正英

鐘楼の影に四龍や三井の寺
艇庫より出でしカヤック風薫り
老鶯に引きとめられる山路かな
マンシヨンの小さく見ゆる深茂り
脱藩の龍馬の大志雲の峰

緑立つ

田下 宮子

草庵に天地有情碑緑立つ
晩翠の終の棲家やリラ咲ける
朝涼の書斎机上に楽譜積み
ピアノ弾く古閑の像や青葉光
なつかしき古閑メロデー窓若葉

(土井晩翠草堂)

(古閑裕而館)

鯛網

井口 淳子

鯛網の浜に轟くふれ太鼓
大漁を祈願の舞や朱夏の風
大漁節天に轟き瀬戸の夏
鯛網の海上絵巻刻忘れ
青葉潮いま捕れ捕れの鯛跳ねる

八月号月評

塩路 隆子

もう八月号の編集かと月日の経つ早さを驚くばかりである。今月は琥珀集から月評を書かせていただくと思う。編集をしながら、新しい句に出逢う期待感をふくらませている。

言葉はや届かねば振る夏帽子 岡 佳代子

最近めきめきと上達が見られる作家である。掲句はよく見かける風景、もしくは、ご自分の体験を句にされたものである。一本道の見送る人が段々小さくなつて行く。もう言葉をかけても届かない。いや無闇に大声を出せる場所でないのかもしれないが、この場合は矢張りこえが届かないほどの距離であろう。振り返る人に大きく夏の帽子を振り別れを惜しんだという。人物に焦点をあわせた奥行きのある、絵画で言えば遠近法の効いた句として評価したい。

今朝の母ことに美しセルを着て 宮崎左智子

同じ経験をした思いがある。夏の着物地に明石縮と

いうのがあった。筆者は母の明石縮を着た姿が大好きであった。セルというのは梳毛糸に人絹をよりあわせたものである。べとつかず夏の初めなど、ざわつとした肌ざわりが涼しさと呼ぶ着物地である。夏帯をきりと締められたおかあさんの美しさに見とれた作品の思い出の作品である。母の字を妣と使われないのは、生きている如くに捉えられた句であるからこそ「母」の字をつかわれたのであろう。いい句である。

指を折る児の算数や花柘榴 森下 康子

子供さんの俳句を得意とされるのは鈴木照子さんであるが、ここにも素晴らしい子供の風景を捉えられた句にお目にかかることが出来た。可愛い一年生の瞬間の姿を上手く句にされた。「指を折る」とあるから足し算であろう。「柘榴」の花は夏に良く見かける可愛い朱色の花であるが、観賞用の花柘榴は結実しない。しかしこの句の場合「柘榴の花」がよく効き、調和のいい一読明解の作品に仕上がっている。このほかにも「バレリーナを夢見る少女水中花」も省略の効いた良い句として注目した。(以下略)